

進学課程の十五年を顧みて：「オーストリア文学研究」余滴

著者名(日)	富山 典彦
雑誌名	埼玉医科大学進学課程紀要
巻	6
ページ	11-17
発行年	1995-04-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1386/00000093/

進学課程の十五年を顧みて

——「オーストリア文学研究」余滴

埼玉医科大学を平成六年三月三十一日付で退職したが、まる十五年進学課程にお世話になった。十五年といえば、オギャーと生まれた赤ん坊が義務教育を終えるまでの期間と同じで、このぼくも、「義務教育卒業」というわけではないが、ここで、自分の人生とオーストリア文学との関わりを振り返ってみたい。

昭和五十四年、本学の八回生とともに進学課程の門をくぐったぼくは、玄関で下足の番をしていた老職員に、「新入生はあっちへ行きなさい」と注意された。後で聞いた話だが、当時進学課程の事務をしていたSさんは、どこへ行ってもいいかわからずに事務室でうろうろしていたぼくを見て、「今年の新入生にずうずうしいのがいるわね」と思ったそうである。大学院を出たばかりとはいえ、ぼくはもう二十代もそろそろ終わりにさしかかっていたのだが、着慣れないスーツとネクタイが、かえってぼくを歳よりも若く見せたのだろうか。今にして思えば、赤面したくなるようなことばかりだったが、故人となられた永松譲一先生は、ご自分の若き日と重ね合わせて、そんなぼくに好意を示して下さった。もう一人、ぼくにとって忘れられない人は、やはり故人となられたフランス語の田辺貞之助先生である。この十五年の出発に際して、まったくタイプの違うこの二人の老大家と出会ったことは、予期せぬ幸運と言えるだろう。

ふつう、就職が決まるまではせつせと論文を書き、業績の数を増やして、就職の際の業績審査に有利なように「勉強」しているが、就職が決まったとたん、もう論文など書かなくなるという話はよく聞いて

進学課程の十五年を顧みて

富山典彦（ドイツ語教室）*

いる。修士論文を書いているときに、その当時のぼくの指導教官だった生野幸吉先生が、「これが君たちの生涯で最高の論文になるかもしれない」と言われたことが、今でも耳の奥に残っている。たしかに、自分のもっているエネルギーと時間のほとんどすべてを集中できた修士論文と違って、大学でドイツ語を教えながら書く論文は、その出来不出来は別にして、ほとんど片手間仕事といっていい。それに、就職が決まってしまうえば、「ドイツ文学者」ではなく「ドイツ語教師」として生計を立てることになるのだから、せつせと論文を書き続けるモチベーションが失われるのも仕方のないことであろう。

修士論文の提出締切直前のぼくは、言葉の綾ではなく、本当に「鬼のよう」だったらしい。それについては面白いエピソードがあるのだが、ここで言うのも憚られるので、自分の胸の内にだけしまっておくことにしよう。ともかく、下宿の部屋に足を踏み入れた友人が、鬼気迫るぼくの姿に慄然としたというのだから、本当に「鬼」だったのだろう。あのときは、すでに本学に就職が内定していたし、締切に一分でも遅れようものなら論文を受け付けてもらえず、そんなことにでもなったら、せつかく内定した就職が駄目になってしまうのだから、それこそ一刻一刻が骨身を削る戦いだっただけだ。

どうにか締切間際に修士論文を提出し、その後行われた口述試験も、就職が内定しているということで大目に見てもらって合格し、四月に晴れて大学の講師になったとき、もう二度とあんな辛い思いはしたく

*現在、成城大学文学部ヨーロッパ文化学科助教授

埼玉医科大学進学課程紀要

ないと、心の底から思った。「もう二度と論文など書くまい、生涯釣でもして生きていきたい」と、そのときぼくは本気で考えた。文学はあくまでも趣味として、好きな本を好きなときに読み、たまには日記風のことなどを書いて、学生にドイツ語を教えながら、のんびりと過ごしてやがて歳を取っていく……関東平野のいずれにある本学は、近くに黒山鉱泉があり、鎌北湖に越辺川、高麗神社に越生梅林、その背後には秩父が控えていて、医科大学だからもちろん病院は完備されているし、本学はさらに特別養護老人ホームさえも備えている。おまけに母体が精神病院ときているから、万全である。本学の教員になってしまえば、生涯にわたってもう怖いものはない。関東大震災級の地震が今にも襲いかかってくると噂されている東京の喧騒を離れて、ここで生涯を終えるのも悪くはないだろう。ぼくは、そそくさと本郷の下宿を引き払って、坂戸の駅前のマンションに移った。

しかし、ぼくはここで、一つ肝心なことを忘れていた。「生涯釣でもして」とはいっても、ぼくは、なんと、生きた魚に手を触れることができなかったのだ。釣糸を垂れることはできても、釣針に掛かった魚をどうすることもできない。これでは、下手な論文でも書いているしかない。

そんなわけで、永松先生の忠告通り、「二年に一本論文を書く」ことになった。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」のたとえ通り、学生たちと一緒に遊びながらも、就職した年には修士論文に大幅に手を入れて、進学課程紀要第一号に載せることになった。活字になってみると、不思議なことに、自分の文章でもどことなく立派に見えて、そのことを永松先生にお話すると、「君はかわいいね」などと笑いながら返答された。

卒業論文も修士論文も、テーマはフランス・カフカだった。テーマをカフカに決めるまでには、さまざまな葛藤があったが、それは、何を自分の研究テーマにすればいいのかわからなくて、と言うよりは、何か一つのテーマに絞ると、それで自分の一生が限定されてしまうよ

うな気がして、嫌だったからである。あの当時のぼくは、自分の才能に半ば絶望しながらも、自分の可能性を「無限定」という意味での「無限」のままにしておきたかった。とはいえ、何かについて書かなくてはならない。そこで、高校時代に、カフカの『変身』を真似て、表題はもう忘れたが、自分が石になっていくという習作を書いたことを思い出し、カフカを取り敢えず自分のテーマにしたのである、と言っておけば一応の説明にはなるだろう。

カフカは生前はほとんど無名の作家、というよりは、プラハの労働者災害保険局で働く謹厳実直な官吏、と紹介した方が適切かもしれない。チェコ語で「小鶉」を意味する「カフカ」を姓にもつこのプラハ生まれのユダヤ人は、住民の大半がチェコ人であるという環境の中で、支配階級の言語であるドイツ語によって教育を受け、プラハ大学で法学の博士号を取得し、エリート官僚になった。父親は、ボヘミアのどこか片田舎から首都のプラハに出てきて、一代で財をなした。ハンス・ヴァイゲルによれば、こういうユダヤ人を「成上がり者 (Parvenu)」と蔑視して呼ぶそうだが、父親のヘルマンは、まんまと息子のフランスを、プラハの支配階級の一員に仕立て上げたのである。

しかしながら、この不肖の息子は、父親の気持ちを知ってか知らずか、旅回りのイディッシュ語劇団に通い詰めたり、文学者というわけのわからない連中と付き合ったり、という状況である。そのうえ、フェリーチェ・パウアーという、写真で見るかぎり、たいして美しくもない女性と二度婚約し、二度とも婚約を破棄し、おまけに、フェリーチェの友人のグレーテ・プロッホという女性が二人の仲を修復しようとして現われたとき、カフカはこの女性とも懇ろになってしまう。もともと保険局の仕事はおざりにはしなかったようではあるが、文学などという得体の知れないことにとり憑かれて、昼間はお役所仕事、夜は原稿書きの二重生活を続け、その無理がたたったのか、胸を病んで若死にしてしまう。

ただし、昼間のお役所仕事の方は暇だったらしくて、文学などとい

うものに対して才能も興味もないだろうこのフェリーチェに、カフカは一日に二度も三度も手紙を書くのである。フェリーチェばかりか、その父親にまで、「自分は文学にしか興味が無い」などと、花嫁の父を不安にさせるようなことを書く。手紙という私的な文書の形をとってはいるものの、それらは、まぎれもなくカフカの作品の一つである。返事が送られてくるかどうかかわからない、いや、きちんと読まれているかどうかさえわからず、相手にとってはきつと迷惑であるに違いない手紙は、手紙というよりはまさに作品そのものである。そして、そのような手紙を数年間にわたってせつせと書き続けるような人生そのものもまた、創作された作品に限りなく近い。文学の道を志しながら、「書くべきこと」が見つからなくて、書くことを断念しかけていたばかりにとつて、カフカのこのような生き方は、ぼくの魂の根幹を揺さぶる何か、であった。

何を書いたか、細かいことはもう忘れてしまったが、「幻の卒業論文」で、ぼくがカフカの『フェリーチェへの手紙』を取り挙げたのは言うまでもない。論文としての出来は良くなかった、それどころか、論文としての体裁すらなしていなかっただろうこの「幻の卒業論文」は、それでもやはり、ただ書いたということだけで、ぼくにとつては意味があった。つまり、「書くこと」と「生きること」との相克に身も心も苛むカフカの姿に、ぼくは自分自身の問題意識の所在を見たのである。その論文で、カフカを「神なき時代の預言者」などと決めつけた記憶がある。

内定した企業への就職を取り止めて受けた大学院に合格するはずもないぼくは、「もしかしたら」という甘い期待も虚しく、予想通り試験に落ちて、「卒業延期願」を大学に提出して卒業論文を撤回し、再起を祈念してもう一年、本気でドイツ語を勉強し直した。もちろんカフカを、特にその最後の長編小説である『城』を何度も読み返して、それを二度目の卒業論文のテーマに決めたことは、言うまでもない。

カフカの作品のうち、生前に完成して刊行されたものは、『変身』『判

決』などごくわずかで、親友のマックス・ブロートによって「孤独の三部作」と呼ばれた『アメリカ』（この作品は最近では『失踪者』と呼ばれている）『審判』『城』の三つの長編は、『アメリカ』の第一章だけが『火夫』と題して発表されたにすぎない。あとは、「自分の死後はすべて燃やしてくれ」との遺言に逆らったブロートによって、遺稿が整理されて次々と出版されたのである。『アメリカ』という表題も、このときブロートが勝手に付けたものであり、ブロートの手になる全集は、世界的なカフカ・ブームの後、本格的な研究が始まると、とかく何かと批判されることになるのだが、ともかくこのブロートの、親友への「裏切り」によって、カフカは二十世紀最大の作家の一人となるのである。

最近、池内紀先生がテレビでカフカについて話されたとき、「カフカの野心」について、はっとすることを指摘された。従来、カフカには「有名作家」になろうなどという野心はまったくなく、生涯にわたって膨大な量の作品を黙々と書き続けたが、カフカにとつては「書くこと」だけが大事なのであり、これらの作品を完成して出版する意志などなかったし、まして「野心」などなかったと、一般に素朴に信じられてきた。カフカの言っていることを言葉通りにとれば、たしかにその通りである。「野心」などという卑しい感情を持たず、ただ「書くこと」のためにだけこの世に生まれてきたカフカ像を思い描いていたのは、ぼく一人ではないはずだ。その証拠に、カフカの死の床で献身的に介護したドーラという女性でさえ、カフカの遺言通りに、自分の手元にあつた原稿をすべて焼却したというから、ドーラにもまたカフカの真意が見抜けなかったのである。

ついにながら、二度も一方的に婚約を破棄されたフェリーチェは、カフカからの膨大な手紙を後生大事にしまいこんだまま、焼き捨てることもなく、カフカの死後そのすべてをある古本屋に売却したそうである。そのお陰で『フェリーチェへの手紙』という、カフカのどの作品よりも分量の多い一巻が「カフカ全集」に加えられることになった。

まあそれが、カフカに愛された（と信じている）女性と、カフカに煮え湯を飲まされた（と恨みに思っているはずの）女性との「差」、であろう。後者はカフカの詐術にまんまと引掛かり、カフカを世に残す片棒を担がされてしまったというわけである。

『城』という作品は、読めば読むほど、新しい発見に驚かされる。

いつかもう一度、この作品について何か書いてみたいと思っているが、卒業論文では、「命名権」ということを問題にして、主人公のKと城との戦いを説明しようとした。例えば、城からKに、アルトゥールとイエレーミアスという二人の助手が派遣されるのだが、この二人が瓜二つの双子で、Kはこの二人をまったく区別することができない。そこでKは、いつも一緒にいて同じ行動をするこの二人を、一つの名前で呼ぶことにするのだが、この助手たちは主人であるはずのKの言うことをぜんぜん聞き入れようとはしない。つまり、「命名権」があるのは城であつてKではない。こんな具合に、『城』の作品世界を構成するさまざまな要素が、「命名権」を軸にすると、非常にうまく再構成されるのである。精一杯そんな思い書き並べた卒業論文だったが、在学年限ぎりぎりまで「文学放浪」をしていたぼくは、大学院への入学を許可されて、「人生裏街道」を歩かないですむことになった。

そして三年後に修士論文ということになる。修士論文は、カフカしか知らないぼくのことだから、もちろんまたカフカということになる。もともと、修士課程在学中に、数人の先生方からいろいろな教えを受けたことは確かである。最近になってようやく、それらの教えが自分の血肉になっていくことに驚いているのだが、ともかくその当時は、カフカ一点張りであつた。

修士論文だから少しは「学問的に」と考えて、『アメリカ』を中心にカフカを論じることにしたが、まだカフカの原典批判版全集が出ていない頃のこと、マックス・ブロート編集の、杜撰とまでは言わないまでも、何かと批判の多い全集を底本に用いたのだから、そもそも「学問的に」なるはずもない。カフカの「書くこと」の試みをその最初か

ら辿りつつ、最初の長編小説である『アメリカ』を位置付け、『審判』や『城』に至る道を明らかにしようという、構想だけは大い論文だった。しかし、構想ばかりが先行して、論文としての緊密なまとまりがなくなり、百五十枚も書いたところで遂に挫折してしまった。端的に言えば「勉強不足」である。いまさらそんなことを悔やんでみても仕方がないので、大きな構想のうちから『アメリカ』の作品構造の分析の部分だけを取り出して、百枚という規定枚数に近付けた。まさに火事場のクソ力、である。そして、「これが最後の論文」と心を決めて埼玉医大講師となつたけれども、結局この論文が、その後いつも、ぼくの「研究業績」の先頭に置かれることになるのである。

次に『審判』論を書けば、ぼくの「カフカ研究」も本格的になったのかもしれないが、とにかくもう論文は懲り懲りだと思つていただけに、カフカにそれ以上深入りしたくはなかった。東京の真ん中から毛呂に移つてきて、しばらくは平穏な日々が続いた。「書くこと」と「生きること」の相克など、もうどうでもよくなつたかのようなだった。「求めることさえしなければ、こころはこんなにも安らかなのだ」と、下手くそな詩を書いた覚えがある。そう言えば、「文学放浪」の最後にぼくは、形式だけはソネットの十四行詩をいくつか書きためていて、このとき、「自費出版」などという立派なものではないが、小遣い銭で印刷して小冊子にした。

詩人のリルケの書いた唯一の長編小説である『マルテの手記』がぼくの心を捉えたのは、いつのことだったろうか。詩人ではないこのぼくが、抑えがたい心の旋律をソネットに託したのとはそもそも比較にならないが、『マルテの手記』の中で「詩は感情ではなく経験である」と書いた詩人のリルケは、その人生での経験をほとんど終えた晩年になつてようやく、『オルフォイスへのソネット』を一気呵成に謳いあげた。詩そのものを研究の対象にすることなど考えられないぼくは、作品構造の分析という手法を用いて、この特異な小説の内部に一步踏み込もうとした。詩人が十年もの歳月をかけて書き上げたこの作品には、

創作の秘密が散りばめられているに違いない、ぼくはそう確信したのである。

詩人になることを志して、パリという大都会の孤独に身を置いた青年マルテは、いうまでもなくリルケの分身である。カフカと同じブラハ生まれのリルケは、カフカとは違ってプラハを離れて、人生を漂泊の草枕に過ごすことになるが、彫刻家のロダンの弟子となるために、妻と幼い娘とを置き去りにして一人でパリに旅立つ。「見ること」から始めるマルテの詩作への努力は、やがて、意識の深層に沈殿している記憶の中から、体験しなかったことの記憶まで呼び起こすことになる。「何を書けばいいのか」という初歩的な問題で躓いていたぼくにとつて、書くべきことは、その方向に求められるかもしれない。もつとも、その頃のぼくはまだ独身で、置き去りにする妻も娘もいなかったが、ふと、しがらみを捨てて一人で暮らすとすれば、マルテのようにパリのうらぶれたアパルトマンの、染みだらけの壁に囲まれた部屋だという直観が、ぼくの心を不思議に貫いた。

その直観を得た時期と前後して、ぼくは生まれて初めてヨーロッパへの旅に出た。たしか、就職後二年目の夏休みだった。最初に降り立ったのはパリで、フランス映画で見たことのある街の風景が、映画そのままに自分の目の前にあった。感激というには、あまりにも複雑な、ほとんどぼくを圧倒するような、ちょうど「めくるめく」という言葉で表現すればいいような、そんな状態だった。街角のカフェに腰掛けたとき、ほとんどぼくは眩暈がして倒れそうだった。そして、その日のうちに、このパリを逃れて、どこかドイツの街へとぼくを運んでくれる列車に飛び乗った。着いた街は、大聖堂で有名なケルンだった。ヨーロッパでの第一日目は、こうして、パリからケルンへの逃避行で終わったが、およそ一月のヨーロッパ旅行中、途中で一度、最後に一度、併せて三度もパリの空気を吸うことになった。恐れを感じつつも、そこに吸い寄せられていく魅力を、パリという世界都市は具えていた。この初めてのヨーロッパ体験については、またどこかで何か書きた

いと思っているが、このときのさまざまな出会いのうち、ウィーンがぼくにとつて、ドイツ語の通じないパリの、言わば代用品となったことをここで述べておかなくてはなるまい。もしもぼくがヨーロッパの街に住むことになるのであれば、それはウィーンを置いてほかにあるまいと、そのとき、たんなる直観が、確信に変わった。そしてそれは、五年後に本当に現実のものとなるのであるが、この時点ではもちろん、この確信にはなんの根拠もなかった。

ぼくは直観力に優れている、などとは言わないが、ふと心によぎったことや、ほんの思い付きや、あるいは思わず口に出った冗談のようなことが、形を変えていつか本当に実現することがある。それはもしかしたらデジャヴュのようなもので、いつかどこかで自分の知らないうちにされた経験が、自分には手の届かない自分の記憶の底に刷り込まれていて、何かのはずみにふと、今の自分を通して意識のスクリーンに一瞬投影されるのではないか、などと考えられる。そしてそれはまた、『マルテの手記』を「一人称の語り手」という視点から、その物語の構造を分析して得られた結果とも、不思議に一致している。

このようにして、自分の知らない深層意識の世界へと、ぼくの興味の目が、徐々に開かれていった。その世界はフロイトが、すでに前世紀末に先駆者として開いている。精神分析学の開祖であるこのユダヤ人の医師が生きていたのは、ほかならぬウィーンであり、また、ウィーンの世紀末があつてこそその精神分析学である。「世紀末ウィーン」が、ぼくにとつて「マルテのパリ」を超えるのに、そう長い時間はかからなかった。最初のヨーロッパ旅行で見たウィーンと、滅びの美しさに輝くハプスブルク帝国の首都である世紀末ウィーンとが、ぼくの脳裏で二重映しになる。そして、その帝国への鎮魂歌を謳った作家であるヨーゼフ・ロートが、突然そこに現われたのである。

カフカは、この帝国の属領であるボヘミア王国の首都プラハに生まれたユダヤ人であり、ロートは、この帝国のはるか東の辺境であるガリチアに生まれたユダヤ人である。ともにユダヤ人という共通性をも

ち、それぞれに違った形でハプスブルク帝国と精神的に関わっているが、とくにロートは、『ラデッキ行進曲』と『カプチン派教会の霊廟』で、帝国への信仰告白をしている。多くの三番目と四番目の論文は、ヨーゼフ・ロートの、東欧ユダヤ人を主人公にした作品を扱ったものとなった。そしてこの時点で、『オーストリア』という問題意識が、ようやくほんの少し芽生えたのである。それまで、ともにブラハ生まれのカフカとリルケを論じて、オーストリアという視点はほとんどなかったと言っている。それどころか、ドイツとオーストリアとの区別さえ、漠然としていた。まあ、旅行したときに、ドイツマルクからオーストリアシリングに通貨を両替しなくてはならないといった程度の区別なら、はつきりしていたが。

カフカを扱った多くの修士論文を評して、田辺貞之助先生は、「科学的に分析している」と言われたが、この「科学的」という評は、先生の文学観からすれば、もちろん褒め言葉ではなく、それどころか、「文学的ではない」という批判でさえあったと思うが、ここにきては、科学的明晰の世界から、文学的混沌の世界へ、再び呼び戻されたのである。それはまた、長すぎた青春時代の終わりとも一致していた。そして、ヨーゼフ・ロートを導きの糸として、オーストリア、特に、ハプスブルク帝国の崩壊からドイツ第三帝国による併合までの、いわゆる両大戦間時代のオーストリア文学が、多くの専門領域として浮かび上がってきた。それはまた、「無限定」に生きようとしていた多くの人生の一時代の終わりであり、また、再出発でもあった。

就職したときに二度と論文など書くまいと決意したくらいだから、ぼくは留学のことなど考えてもいなかった。たいていの人はD A A Dの奨学金でドイツに留学するのだが、三十二歳が年齢制限のD A A Dは、そんな具合ですでにみすみす通り過ぎていた。留学を思い立ったとき、幸い、オーストリア政府の奨学金の年齢制限である三十五歳にはまだ間があった。それに、「念ずれば通ず」のか、雑誌『オーストリア文学』の編集を通じて知り合った人たちの中に、ウィーンで博士

号を取得した人がいて、その紹介状が何よりもぼくの助けとなり、結果としてはあつさりと試験に合格して、ウィーン留学が実現した。

「あつさりと」と言ったものの、ここに至るには、とうてい一言では言い尽くせないさまざまなことがあったが、今にして思えば、何かある方向に人生が動いて行くとき、それはちょうど水が高いところから低いところに流れるようなもので、ごく自然に物事が転回していくように見える。そしてまたこの人生には、何度かそんなふうに物事が転回していく時期があるようだ。オーストリアという国についてはもちろんのこと、オーストリア文学についても、ほとんど基礎知識もないままに、ウィーンの学生寮で一人暮らしを始めることになったが、逆に考えれば、何冊かの本を読んで乾いた知識を仕入れるよりは、無我夢中でそこに飛び込んでみて、自分の感覚によって何かを掴み取る方が、欠落は多くても生きた知識が得られるだろう。そしてそれは、まさにその通りだった。

泳ぎ方も知らないで海に飛び込んだぼくだったが、ともかくそこで、「両大戦間時代のオーストリア文学の専門家」として、エルンスト・ヴァイスという、大きな獲物をこの手に掴んで陸に上がることができた。それまでは進学課程の紀要にしか論文を書いていなかったが、初めてオーストリア文学研究会の雑誌『オーストリア文学』に書いた論文は、日本ではほとんど誰も知らなかったこの「医師にして作家」ヴァイスを、「両大戦間時代のオーストリアの目撃者」として紹介したものであった。帰国後最初に書いたこの論文を皮切りに、ヴァイスの作品を一つ一つ取り上げる構想をもって、進学課程紀要に一本、短大の紀要に三本、ヴァイスの作品論を書いている。この構想の途中で、平成五年秋の学会のクロキウムの話がいきなり舞い込んできた。そのテーマは「八十年代の女性文学」であり、ぼくがいつの間に「女性文学」などやっていたのか、自分の研究史を振り返ってみて、ほぼ皆無に近い。ただ、ウィーンにいたとき、現代のオーストリアで活躍している作家はいないものかと、何人か物色してみても、バーバラ・フリッツシュ

ムートと出会ったことがある。彼女の朗読会に出かけて、本にサインをしてもらったとき、「いずれあなたの作品を日本語に翻訳したい」などと、実現しそうなことを平然と言ったら、「わからないところがあったら、いつでも自分のところに電話してください」などと軽く返答するのである。それ以来、フリッツシュムートの作品は、目につき次第買い揃えてあったのだが、学会誌で「女性と文学」を特集に組んだとき、編集長から「オーストリアの女性作家で誰かいませんか」と尋ねられて、フリッツシュムートと即答したのがきっかけで、この特集の原稿をぼくが一本書くことになってしまった。

そのことがどこかに聞こえて、秋の学会で「女性文学」のコロキウムが企画されたとき、やっと学会誌の論文を書き終えたばかりのぼくに声が掛かってしまったのである。それこそ「場違いな所」に引き摺り出されてしまったのだが、それもまた何かの縁で、ぼくはもしかしたらこれから、「フリッツシュムートの専門家」になっていくのかもしれない。

それとは別に、平成六年はヨーゼフ・ロート生誕百年ということで、その年の秋の学会では、当然のことながら、ヨーゼフ・ロートのシンポジウムが開かれる。このぼくにも声が掛かったが、カフカのときには、どこからもまた誰からも声を掛けてもらえなかったことを思うと、隔世の感を禁じ得ない。

この人生を不可逆的に流れ過ぎている時間は原則的には一樣なのだろうが、こうして進学課程での十五年を振り返ってみると、時間は凝縮したり拡散したり、あるいは先に跳んでみたり後に戻ったり、それこそフアジーな動きをしているように思われる。それでいて、どこかに一本赤い糸が通っているようでもある。「文学青年」だった昔は、「何を書けばいいのか」と、ただそれだけがぼくのエネルギーを空転させていた。「書くべきこと」を求めて、辛い涙を流した。しかし今、こうして、論文を書く合間に自分の研究と人生とを振り返っていると、書いても書いても書き尽くせないものが、すでにそこにできつつあるよ

うに思われてならない。

これから先、ぼくは取り敢えず、「オーストリア文学の研究者」として生きていくことになるが、文学研究と人生とが、互いにある種の緊張関係を孕みながら、これからも続いていくのだろう。そしてその関係の中で、さまざまな人や出来事に出会い、書き尽くせない思いを意識の底に残していくのだろう。進学課程での十五年を振り返ってさえ、まだまだ書くべきことや、書いておかなくてはならない人々との出会いがある。ようやくぼくにも、人間としての「歴史」が生まれ始めたということだろうか。(平成七年一月十一日受理)